急速に進む琉球弧の軍事要塞化

昨日のレポートで毎日新聞 2 日朝刊「九州・南西地域における主要部隊の配備(2016 年以降)」から、防衛「南西シフト急ぐ」という記事を紹介した。『環境と公害』最新号の桜井国俊論文に掲載された「自衛隊の南西諸島等配備・増強計画」という図に注目した。桜井論文「防衛施設整備と環境問題」冒頭の表題について紹介したい。

2022 年は沖縄の本土復帰から 50 年の節目の年に当たる。沖縄は軍事基地のない平和憲法が支配する本土への復帰を願ったのだが、国土面積の 0.6%を占めるに過ぎない沖縄に今も 70.3%の米軍基地が集中している。

そして今、琉球弧では、いわゆる第一列島線に沿い、防衛施設(自衛隊基地と米軍基地)の整備が急速に進められている。「自衛隊の南西シフト」と呼ばれるものである。

中国脅威論が喧伝される中、米中対立への対応として日本政府は「南西諸島は日本防衛の最前線」と位置付け、図 1 に示すように西は沖縄県の最西端に位置する与那国島から東は鹿児島県薩南諸島の馬毛島まで急速な防衛施設の整備を進めている。

日米両国政府は、対中防衛のため、米軍基地及び自衛隊基地を日米共同の基地とする指揮命令系統の一本化を急速に進めている。そして島嶼戦争の初期においては、米軍は第二列島線まで下がり島嶼防衛は自衛隊が担うこと、ミサイル攻撃の終了後に米軍が島嶼奪回作戦を展開すること、という大枠のシナリオも描かれている。

描かれているシナリオは琉球弧を捨て石とする作戦であり、そこに暮らす人々の安全は視野の中にはない。そして「選択肢としての敵基地攻撃能力の検討をためらわない」という 2021 年 12 月 6 日の岸田首相の所信表明演説は、専守防衛という憲法の縛りが今や全くの有名事実と化したことを示した。一方的に沖縄を犠牲とする南西シフトがメディアの沈黙の中で急速に進行し、沖縄に暮らす人々の命が消耗品扱いされ、Okinawan Lives Matter と呼ばれるまでに至っている。それと同時に琉球弧の各所で世界に二つとない自然環境が取り返しのつかない形で破壊されてきている。

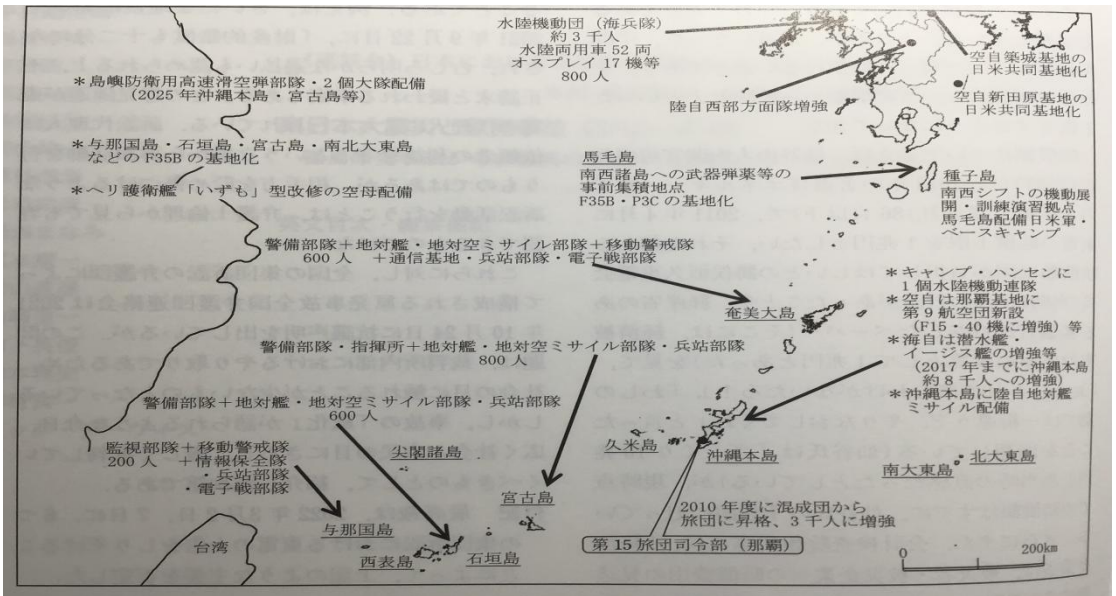

図 1　自衛隊の南西諸島等配備・増強計画[1)]

（2022 年 5 月 4 日）